（実践事例）

# 学生FDサミット2013年夏 分科会開催報告
## ―それでも僕は考えたい　学生FDの「思い」―

若宮　健・乙倉　孝臣・越山　沙紀・坂本　由香
竹谷　美里・中沢　正江・森脇　可奈子

高等教育フォーラム　第４号抜刷　平成26年３月

高等教育フォーラム　Vol. 4, 2014

# 学生FDサミット2013年夏分科会開催報告
## ―それでも僕は考えたい　学生FDの「思い」―

若宮　健[1]・乙倉　孝臣[2]・越山　沙紀[1]・坂本　由香[3]・竹谷　美里[4]・中澤　正江[5]・森脇　可奈子[5]

FD活動、特に学生FD活動において、FDに関わる個々人のFD活動への思いは非常に大切であり、メンバー間や教職員との思いのぶつけ合いによって活動を成功させることができる。そう考えると、各大学の学生FD活動を推進させている要因として「思い」に着目し、FD活動の質の向上につなげることは有意義ではないだろうか。本稿では、京都産業大学学生FDスタッフ燦が取組んだ学生FDサミット2013夏での分科会「それでも僕らは考えたい　学生FDの『思い』」について報告する。

**キーワード**：学生FD、個々の思い、分科会の構成手法、大学共創

### 1. はじめに

学生FDのサミットや大学間交流会、学会では、「自大学の活動内容を紹介する」、「他大学の活動内容を聞く」ことが多い。そのような場での情報交換は自大学の活動の見直しや新たな取り組みを行うにあたって非常に重要である。しかし一方で、他大学メンバーとの実際のやりとりを思うと、表面的で何か物足りなさを覚えることも多い。

学生FDサミット2013夏で京都産業大学学生FDスタッフ燦[1)]が分科会を担当するにあたって燦ではどうすれば分科会などのイベントで参加者がもっと深みのある議論をできるのかについて議論した。そこで私たちは、今までの発表やパネルディスカッション形式の一般的な分科会では、それぞれの団体に所属しているメンバーの深い気持ちを知ることができない点に注目した。私たちが活動をする上で重要な率直な「思い」、「熱意」そして「プロセス」は表面化しにくい。特に「思い」のような属人的なことに着目したところで、明日からの活動の一体何に貢献するのかと思いがちだ。しかし学生FDスタッフの活動は、「授業をよくしたい」、「こんなことを実現したい」というような思いが非常に大切であり、さらにメンバー間や教職員との思いのぶつけ合いがあるからこそ活動を成功させることができる。燦では、このような議論を通じて、「思いのぶつけ合い」が、学生FD活動の根幹を成しているのではないかと再認識するようになった。そして各大学の学生FD活動を推進させている要因として「思い」に着目することは意義深いことではないだろうか。このような考えから、学生FDに関わる人々の「思い」に焦点を当てるというこれまでにない分科会をやってみたいと考えた。

更にこの分科会には、現在の燦の活動を見直すきっかけにしたいというねらいもあった。燦では新しく加入したメンバーと以前から活動しているメンバーの間には、活動への馴染みやすさや理解度・経験量が異なるために活動に対する認識のズレが生じるなどの問題があった。燦は2011年の結成以来、３年を経て、「授業改善がしたい」、「みんなで何かを創り上げたい」などの思いのほかに、「FDはよくわからないが燦が好きだから所属している」など多様な「思い」がメンバーの中にあることが浮き彫りになってきた。いま学生FDは世代交代の時期を迎えており、このような現状に直面することは決して燦に限ったことではないだろう。「思い」について真剣に考える場を提供することは、学生FD関係者にとって有意義だと考えた。

これらの考えから、「それでも僕は考えたい　学生FDの『思い』」という燦主催の分科会が生まれた。明日からのFD活動に具体的にはいかにも役に立たなそうな、抽象的な事柄である「思い」に敢えて焦点を当てたことから、分科会タイトルには「それでも」という前置きをつけている。

燦は当初より、この分科会の参加者に発見と感動を与えたいと考えていた。今までにない手法で「思い」に焦点を当てた分科会を開催することで、参加者が新たな視点

[1]京都産業大学 総合生命科学部２年次、[2]京都産業大学 経済学部３年次、[3]京都産業大学 法学部２年次、[4]京都産業大学 経営学部２年次、[5]京都産業大学 学長室

や発想を得て、学生FD活動全体を刺激・活性化し、参加大学の活動の質を向上させるきっかけにすること、またイベント内容を企画することで燦自身もヒントを得ることを目的として分科会は企画された。

本稿では、まず「１. はじめに」で、分科会「それでも僕は考えたい　学生FDの『思い』」の着想に至った経緯について述べた。続く「２. 分科会の特徴と構成」で、この分科会の概要、特徴、構成概要について述べる。「３. イベント構成の意図と運営」では、「２. 」で述べた分科会の構成について、各構成の意図と、運営方法、また運営によって得られた知見について述べる。「４. 本分科会の意義と効果」では、質問票調査の結果分析を行い、本分科会の意義と効果について考察する。最後に、「５. まとめ」にて、本稿を総括する。

## ２. 分科会の特徴と構成

本章では、分科会の概要について触れた後、分科会の特徴と構成について述べる。

### 2.1.分科会概要

タイトル：それでも僕は考えたい　学生FDの「思い」
日時：2013年８月25日（日）　13：10-14：40
場所：立命館大学　衣笠キャンパス
参加者数：80名（ただし質問票記入者数）
主催：京都産業大学AC燦

### 2.2.分科会の特徴

① 参加者が単純に自大学の活動の報告・質疑応答を行うような一般的な分科会形式を採用せず、少人数で本格的なグループワークを行う（３名／グループ）。
② 自由な発言や思考・発想を許容できる環境を提供し、参加者個人がFD活動を通してどのような思いを持っているかを発見する機会を提供する。
③ 参加者に「活動をする上での活力」、つまりFD活動を続けていく上での「大切なもの」を見つけてもらい、「明日から頑張ろう！」と感じてもらえる仕掛け作りをプログラム全体で目指した。

### 2.3.構成

分科会は次のような流れで実施された。
(a)分科会趣旨説明
(b)登壇者の「思い」
(c)グループワークの流れとルール説明
(d)アイスブレイク〈５分程度〉
(e)「思い」の記述〈10分〉
(f)「思い」の共有〈20分〉
(g)「思い」の振り返り〈３分〉
(h)感想の共有〈５分〉
(i)メッセージカード記入〈10分〉
(j)エンディング・メッセージカード交換

## ３. イベント構成の意図と運営

本章では、「２. 」で述べたイベント構成に沿って各構成の意図と運営によって得られた知見について報告する。

### 3.1.受付

今回の分科会では座席票を配布して、座席指定を行うことで、スムーズに十分なワークスペースを確保した動員が可能となった。また、所属大学が異なる方がどんな話題でも話しやすいため、参加者の所属大学に偏りが出ないように受付時に気を配った。

### 3.2.分科会趣旨説明

一般的な分科会では数名の登壇者（パネラー）を得たパネルディスカッション形式が基本であるが、今回の分科会は参加者共通の話題である学生FDへの率直な「思い」をテーマとした。私たちは「思い」を引き出すためには、少人数でじっくり話すグループワークを行うことが有効であり、既存の分科会形式を崩すことで柔軟で新しい雰囲気を醸成することができると考えた。実際に完成したプログラムには、既存の分科会形式とは異なる点が多数存在している。このような取組は燦としても初めてであるため、冒頭で多少無責任ではあるがどのような結果になるのか予想がついてないことを正直に告白し、参加者の協力を促した。次に、テーマとしてよく取り上げられる「大学をより良くする為の具体的な取組」、「学生FDの結びつきを強くする為の具体的な取組」、「学生FDを起ち上げるための具体的な取組」などはFD活動においてとても重要であることを確認した。その上で、学生FDに関わる、特に学生がよく口にしている「思い」の具体例を挙げ、「思い」の種類は非常に多様であること、および「思い」について考えることの重要性を参加者に説明した。最後にこの分科会の目標を参加者に明確に伝え、違和感なく、趣旨と形式を理解していただけるように工夫した。

### 3.3.登壇者の「思い」

企画時に事前に行ったワークの練習では、「突然、『思い』についてのワークを始めましょうと言われても、何を

考えたらいいのかわからない」という感想が多く見られた。そこで、ワークを始める前に数名の参加者に自分の思いを語ってもらうことで、参加者に多様な視点から考えるヒントを提供するとともに、気軽に何でも話してもいいというワークに入りやすい雰囲気作りをしたいと考え、本学及び他大学の学生FDスタッフ合わせて４名の登壇者に自分の思いを語っていただくことにした（図１．参照）。登壇は、活動歴の短い学生の事例として燦の１年次・矢野享佑（活動歴約２ヶ月）、学生FDサミットというイベントを主催する側の事例として立命館大学の３年次・森本拓暢さん（活動歴約１年・留学期間を除く）、活動歴の長いベテラン学生の事例として追手門学院大学の４年次・大木優衣さん、燦の４年次・林隆二が担当した。

このとき、登壇者に対し、それぞれの「思い」について、良い面も悪い面も忌憚なく表現するよう依頼した。これにより、参加者にとって、ワークに入り込みやすい環境を作り出すことができ、その後のワークが円滑に進んだと考えられる。

図１．「思い」を語る登壇者

### 3.4.グループワークの流れとルール説明

企画段階からワークが長く感じないか、ファシリテーターがいないことによる時間配分やペース作りの難しさ、「思い」は人ぞれぞれだから間違いはない、言いたくない「思い」もあるのではないか、FDをやっていない場合にはどうするのかという懸念が浮上していた。

これらを解消するために、主催者側の意図を明確に伝え、細かいところまで気を配ることを意識しながら説明を行った。

### 3.5.アイスブレイク

「思い」について本音を語り合うためには、アイスブレイクが重要である。学生FDサミットの参加者には名札が配布されていたため、それを用いた自己紹介を各グループで行っていただいた。もし時間が余れば、自大学の活動紹介やフリートークを自由に行っていただくことにした。このパートにより、後の「思い」の共有をスムーズにすることができた。

### 3.6.「思い」の記述

プラスとマイナスの２種類の思いをワークシートに書く時間を別々に設けた。あとからプラスの部分を書いた方が後味はいいという点から、マイナス・プラスの順で考えてもらい、晴れやかな気分で次のワークに進んでもらった。

この時、参加者には他人と話すのではなく１人で考える時間にしてほしかったため、また考えやすいような雰囲気を提供するため、歌詞の入っていないBGMを流した。

### 3.7.「思い」の共有

前述の２種類の思いを話す時間を別々に設けた。本格的なグループワークのスタートである。今回は、グループ数が非常に多く、全てのグループに燦のファシリテーターを置くことが困難であったため、全体にサポーターを数人置くことで、話しが滞っているグループをより円滑なワークへ転換するように試みた。サポーターが全体の雰囲気作りに寄与した効果は大きいと考えられる。実際にアンケートで、「〇〇さん、話を聞いてくださり、ありがとうございました。」というようなコメントも見られた。

図２．グループでの「思い」の共有

一方で、参加者自らがワークを進めていけるプログラムに構成したため、多くのグループでは活発な話し合いが行われていた（図２．参照）。

### 3.8.「思い」の振り返り

グループワークで話して終わるのではなく、その思いがどういったことなのかを、もう一度自分の中で考える時間が作りたかった。ここでは参加者に個人ワークに徹していただきたかったため、再度歌詞の入っていない静かなBGMを流し、リラックスしながら考える時間とすることを意識した。

### 3.9.感想の共有

グループワークの最後に、各自が自分の「思い」を振り返って気付いたことを含めた情報の共有、およびグループワークで実際に話してみた感想の共有を目的として話し合っていただいた。

### 3.10.メッセージカード記入

一般的にグループワークでは、前述した感想の共有で終了するのがほとんどだろう。ここで、私たちは「何か持って帰れるもの」を形にすることが、私たちがこの分科会の目的とした「参加者がFD活動をする上での活力」につながると考えた。この発想から誕生したのがメッセージカードである（図３．参照）。参加者全員に話し合ったメンバーに対して自由にメッセージカードを記入していただいた。参加者からの評価も上々であり、よい思い出になったようである。

また、カード裏面には、日付や分科会名等を記載したことで、本分科会参加の記念となるように工夫した。

図３．メッセージカード

### 3.11.エンディング&メッセージカード交換

燦が日頃から意識している理念は「アホなことを真剣に、マジメなことを楽しく。」である。「最後には感動をもたらしたい」と考え、分科会前日に撮影したサミットにおける他大学のポスターセッションや全体会でのスナップ写真（本分科会参加者を含む）で作成したスライドショーを準備し、照明を落としたうえで静かなBGMとともに流し、メンバーの一人がまとめのスピーチをするというサプライズを用意した（図４．参照）。最後に参加者がメッセージカードの交換を行い、燦主催の分科会はこれにより完成に至った。

図４．エンディングの工夫

以上が、本分科会の各プロセスの意図と運営、またそれによって得られた知見である。

続く「４．本分科会の意義と効果」では、このような構成で実施された本分科会について、参加者や燦にとって、どのような意義・効果が見られたのかについて報告する。

## ４．本分科会の意義と効果

本分科会の意義と効果を把握するため、分科会では質問票調査を実施した。

量的調査部分の結果をまとめたものが、表１である。

参加者全員に、イベントの満足度を「この分科会に参加してみどうでしたか？どれか一つに○を付けて下さい。」という形で質問を実施し、「５．とてもよかった」～「１．とても悪かった」の５段階での評価を求めた。表１「満足度」は、この値の平均値である。イベントの効果を実感したかどうかを把握するためには、「ワークを通じて自分を見つめ直すきっかけとなりましたか？」という質問を実施し、「１．なった」と「０．ならなかった」の２値での評価

を求めた。表１の「効果実感」は「１」が選択された割合である。

**表１. 本分科会の満足度と効果実感**

| | 満足度 | 効果実感 |
|---|---|---|
| 学生（N=71） | 4.20 | 93.0% |
| 教員（N= 3） | 4.67 | 100.0% |
| 職員（N= 6） | 4.83 | 100.0% |

表１より、満足度、効果実感ともに学生・教員・職員の三者から高い評価を得た。このような結果が出た理由として、日常では話し合う機会の少ない三者が、「思い」というテーマについて互いに話し合うことの新鮮さや刺激などが大きく反映されたと考えられる。

自由記述に関しては、「関わっているスタッフの気持ちを言い合える場は今までになかったので、とても面白い企画だった」、「少人数で話すことで、より深く話をすることができた」という学生や「自由に話せる雰囲気作りがよかった」という職員の声があり、座席指定や少人数で本格的なグループワークを行う今までにはない形式の分科会を採用したことで、初対面ではあるものの、本音で語り合えるような場を提供できた。また、「他大学の学生とFDについて語り合うことで熱い何かをつかみ取ることができた」、「思いを三人で共有することによってモチベーションの上昇につながった」という学生や「自分自身がなぜ学生FDに携わっているのかということを振り返る良い機会となった」という教員の声もあり、活動の中での喜び・悲しみ・不安などあらゆる「思い」を共有することで、互いに刺激を受け、参加者にこれからの活動の原動力へとつながるものを得てもらうことができた。これらのことから本分科会は、燦が狙いとした意図通りの結果となり、非常に意義のあるものとなった。

新しく加入した燦のメンバーにとっては初めての大きなイベントで、それぞれ不安もあったが、グループワークを行う参加者たちの笑顔や楽しそうな様子、感動する様子を見て、「初めは何かよくわからなかったけれど、この分科会に行ってよかった」、「主催者側の自分たちも明日からがんばろうと思えた」など本分科会をきっかけに新たな何かを発見した。この経験は、成長へつながるとともに燦のメンバー間の認識のズレを縮め、本分科会の実施は燦にとってとても納得のいくものになった。

本分科会で企画側として最大限に気を配ったことは、どれだけ共感を得られるプログラムにできるかであった。終了後に回収したアンケートでは多くの参加者から賞賛の声をいただき、共感を得られるプログラムになったと推測できる。その要因として自由記述欄には、BGMを流した等の演出および「思い」に焦点を当てたテーマ自体がよかったとの記述が目立った。これらの反響から、本分科会では、学生FD活動が多様化する中で参加者が「共通の話題」で話し合うことができたのだと推定でき、運営面で「新しい分科会形式の確立」が期待できる。

また、ワーク中に使用したパワーポイントや配布物等の活躍は大きく、当日の運営に携わったメンバーだけではなく、燦のメンバー全員で創り上げた分科会となったことは間違いない。

## ５. まとめ

この分科会の目的は大きく分けて２つあった。「参加大学、自大学の活動の質を向上させるきっかけにすること」、そして「この分科会を企画することで自分たちのヒントとすること」である。

「思い」という抽象的な事柄に着目し、本格的なグループワークをメインとした構成の分科会を考案し、実施したことにより、４で述べたように、「構成」、「演出」、「テーマ」について、それぞれ参加者から期待以上の評価を得た。

本分科会では、FDというのがよくわからない、自分が何をすればいいのかわからないなどの不安を抱えていた燦の新メンバーにとっては、運営に携わることで、たくさんの人の笑顔や喜びを実際に目で見る機会にもなった。この経験はこれから活動をしていく上でプラスになり、具体的な行動につながっていく原動力となるだろう。どのような行動に移すのかは人それぞれであるが、少なくとも自分自身がFDスタッフであることに対して自信を持つことができたのではないだろうか。活動歴の長かったメンバーにとっても、自分の考えを見つめ直し、原点に帰って考え直すことができたと考えられる。本分科会は燦という組織にとっても、新たな成長を得られた点で非常に意義があったと言える。

最後に、この分科会の趣旨を振り返りながら、本分科会の目的が達成されたのかを、もう一度吟味する。

分科会の趣旨説明で、私たちは学生FD活動に関わる学生がよく口にする「思い」の具体例として、次のようなものを挙げた。

・FDはよくわからないけれど、活動は楽しい
・せっかくきたのに、やることないの？
・忙しい
・何か「でかいこと」を成し遂げてみたい

FD活動に関わる者に限らないが、大学の中で、我々は

様々な感情を持ちながら、日々生活をしている。しかしFD活動に関わる者は時に「FDとは何か」、「どのようにすれば成功するのか」などの知識・ノウハウの前に、それらの知識・ノウハウを活かす活動の源泉となる「情熱」や「感情」つまり、「思い」を忘れがちではないかと、燦は感じていた。一般的な分科会形式への抵抗感もこの現れといえる。燦のこれまでの学生FDサミットやコンソーシアム京都主催のFDフォーラムでの発表[2)]は、全てその意味では、「参加者に刺激を与えることで(時に参加者から『刺激が強すぎたのでは』と言わしめる程に)、各人の活動の源泉『思い』に立ち返って欲しい」という願いが込められたものと捉え直すことができる。これは、「その人らしい大学での過ごし方(仕事／本分)を取り戻して欲しい」との願いであり、言い換えれば、燦の活動目標である「大学を構成するもの全てを笑顔にしたい」という願いに直結している。

このように考えてみれば、燦にとっての組織改善・大学改善とは、「そのような構成員の、大学における自由な振る舞いをいかに許容できるようにすることができるか」を意味していると言える。

本分科会の取組は、(他大学も含め)大学を構成する者に、それぞれの『思い』を思い出させ、それを周囲の参加者(基本的には他大学のFDの事情を知る者)と交換し、許容し合うというプロセスを提供した。

このプロセスでは、愚痴のようなネガティブな思いも、突拍子もない野望のような思いも忌憚なく交換された。そして、参加者の多く(学生93%、教職員100%)は、そのことによって今後の活動や自身について考えるきっかけを得た。質問票の自由記述では「自分は先輩が怖いから(学生FDを)続けているだけだということが分かった」というような、本来の自分に改めて気付き、立ち返るような胸中の吐露もみる事ができ、思った以上に参加者が自身の内面を深く振り返っていることも確認されている。

これらの結果から、このような「思い」の交換というプロセスは、主催者である燦の意図通りあるいは想定以上に参加者に機能したと言える。

大学は、「生きていく上で、学ばなければいけないことを、仕方なく学ぶ」という場ではない。また大学の学びはコースワークだけで作られているわけではない。自分の中に眠る、『思い』に素直に従って、より良いもの(経験・知識)を得ることも大学で学ぶ意味である。授業に出て、合間にディスカッションをして、家で授業の課題をするか、メンバーとスカイプで話しながら資料を作る。そんな慌ただしい毎日の中で、「思い」がなかったら、一体誰が「もっと前へ進みたい」、「もっとクオリティの高いことがしたい」などと思うだろうか。

大学は、「誰もみたことがないものをみたい」、「誰も知らないことを知りたい」、「誰も参加したことのないようなイベントをつくりたい」というような構成員のチャレンジに応える場であり、そこではもっと多くのチャレンジに大学が応えられるように構成員である学生・教員・職員が力を合わせて環境を改善していくことが望ましいはずである。

そのために最も必要で、原初となる前提は何か。それは、なによりも、大学を構成するものが、「やりたい」、「やりたいことをやっている」という「思い」を持っていることだと、この分科会に参加した学生・教員・職員の「思い」に触れ、我々も改めて気付かされた。

分科会でのこのような気付きから、2013年11月に実施した学内イベント「京産共創プロジェクトⅢ」では、「単位の意味と授業の価値」「大学における時間の過ごし方」といったネガティブな意見や対立意見が出やすいトピックをあえてテーマの中心に据え、学生・教職員間で互いに自由な意見を許容しあうことを試みた。この成果については、現在、グループワークで得られた付箋データや共創シートと呼ぶ質問紙調査の結果をとりまとめ中であり、後に別稿にて報告する予定である。

## 謝辞

本分科会の登壇について、突然の依頼にも関わらず快く引き受けて下さった立命館大学の森本拓暢さん、追手門学院大学の大木優衣さんに、心より感謝の意を表します。

いつも共に、刺激を与え合い、「アホなことを真剣に」全力で創りあげている燦のメンバー全員に、とりわけ本稿の作成においては、質問票データの集計を担当した遠藤愛子、徳田義貴、神谷諒に感謝します。

注

1)Academe Co-Creating Committee（大学共創委員会）燦(SAN)は、愛称として「燦」または「AC燦」と呼ばれている、京都産業大学の学生FDスタッフ組織のことを指す。

2)燦は、コンソーシアム京都主催の第18回FDフォーラム(2013年２月22日(土)、23（日)立命館大学衣笠キャンパスで実施)のシンポジウム②「学生とともにすすめるFD」で型破りな劇調の活動紹介を行った。

実践事例

# A Session Report on Our Thoughts towards Student-initiated Faculty Development

Takeshi WAKAMIYA[1], Takaomi OTOKURA [2],
Saki KOSHIYAMA[1], Yuka SAKAMOTO[3],
Misato TAKETANI[4], Masae NAKASAWA[5],
Kanako MORIWAKI[5]

In implementing faculty development (FD) activities at a university, especially for the student-initiated FD activities, the individual thoughts of those who participate in the activities are very important. Successful FD activities are only brought through exchanges and negotiations of thoughts among the members including students participating in the FD activities, faculty members, and administrative staff. In this regard, we consider it meaningful to focus on individual thoughts as enabling factors to promote effective FD activities. This article reports FD activities of the Kyoto Sangyo University's Students' FD Association, *SAN*, and the design and results of our session entitled, 'We Dare to Think of It: Our Thoughts Towards Student-initiated FD Activities' held at the *Student-initiated Faculty Development Summit in 2013 Summer*.

KEYWORDS: Student-initiated Faculty Development, Individual Thoughts, Session Development, Academe Co-creating

2013年11月29日受理

[1]Faculty of Life Science, [2]Faculty of Economics, [3]Faculty of Law, [4]Faculty of Business Administration, [5]Center of Presidential Affairs